

「彼岸過迄」論

—〈導入〉としての高等遊民—

はじめに

「時代閉塞の現状」は、明治四十三年八月から石川啄木よつて執筆された、当時未発表の評論である。明治四十三年六月の幸徳秋水ら二十六名の逮捕と翌年のそのうち十二名の死刑執行という、いわゆる大逆事件の狭間に書かれたという時代背景から、この評論は、社会批判、特に大逆事件の契機となった秋水らの逮捕に対する批判の意味合いで取られることが多い。だが、「時代閉塞の現状」には「かくて日本には今『遊民』といふ不思議な階級が、漸次其数を増しつつある」という箇所もあり、当時の青年層に対する批判も含まれている。ここから、「時代閉塞の現状」は同時代の青年たちをめぐる社会状況を知るための手がかりの一つとして認識されている。

この問題を漱石のテクストにおいて考える場合、「彼岸過迄」（明治四十五年一月〜四月 『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』）が対象となる。それは、このテクストで初めて高等遊民という言葉が使われたということ、大逆事件以後に漱石が著した最初のテクストであるということからである。

米田利昭氏も、このような観点から「彼岸過迄」を説いている（注1）。氏は、先に触れた「時代閉塞の現状」中に見える「遊民」が「僻村の中学卒業生」であることを踏まえて、次のように言う。

漱石も啄木も同じ状況を見ているのだが、漱石は広くという

山下 航正

か狭くというべきか、仮構的に青年の関心事を見て、そこから特異な或る青年の内なる悩みへどんどん降りてゆく。啄木は現実のわが貧乏に立つて、世間の不平等と閉塞と青年の無氣力を鋭く打ちすすめる。そこが同じ遊民でも大学卒業生と中学卒業生とに別れる所以だった。

米田氏が明らかにするのは、「遊民」という当時の社会状況に対して示された見解の、啄木と漱石とにおける差異である。この後氏は、敬太郎や須永、松本といった人物たちの分析を試みている。

今見たように、高等遊民は「彼岸過迄」分析における有効な観点の一つである。だが、研究においては語り手の問題も重視され、「報告」と「雨の降る日」とを境にして、前後の分断、語り手の移行として論じられてもいる。つまり、「彼岸過迄」の分析は高等遊民と語りとの二大視点によつて多く行われているのである。ところが、この二つを関連させて説いた論考は少ないように思える。

本稿では、特に「彼岸過迄」における語り注目して分析を行う。そして、高等遊民に関する論考も踏まえ、語り手の移行の意味、またそこに見られる漱石の意識と方法について論じる。

一 語り手の方法

「彼岸過迄」は、「風呂の後」「停留所」「報告」「雨の降る日」「須

永の話」「松本の話」「結末」の七章から成る。「結末」が語り手による要約であるので、実質的な物語は「風呂の後」から「松本の話」までの間で展開される。そして、敬太郎の言動を追う形で前半の三章が、また、千代子、須永、松本の三人によつて過去の出来事が敬太郎に示される後半の三章が語られている。

ここで二つの問題が浮上する。一つは、物語に複数の語り手が存在することである。例えば「心」（大正三年四月〜八月 『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』）のように、物語の中で人物の書簡をそのまま提示するような場合には、一人称もしくは三人称で語られる中に別の語り手（書簡の書き手）が存在することは特異なことではない（注2）。だが「彼岸過迄」においては、「須永の話」「松本の話」は須永と松本の語りによつて成り立っているのである。そしてもう一つは、「雨の降る日」が一人称ではなく三人称で語られていることである。後半の三章において敬太郎は三人の人物から過去の出来事を聞くのだが、その中で、千代子によつて語られた松本の過去だけが、語り手である彼女自身の言葉で語られていないのである。以下、それぞれについて考察する。

まず、複数の語り手についてである。三人称の語り手は、当初敬太郎の言動を中心に語っていたが、「報告」以後では須永の過去を語る一人称の語り手（須永や松本）に役を譲っている。そのため、物語の前半と後半での分裂が見出され、テキストを「須永の物語」として読むか、敬太郎の冒険譚として読むかという、評価の立場を二分する（注3）。ことになると考えられる。そして、テキストに「須永の物語」を読む場合は登場人物としての敬太郎という意識は薄まり、

彼への評価は「敬太郎は遂に傍観者に終る」（注4）、「情報受信者」（注5）、「舞台廻し」の役」（注6）といったものになる。そして「敬太郎の冒険譚」とする場合には、物語に「敬太郎の成長」（注7）を見出すことになるのである。

この問題について内田道雄氏は、テキストの各章における語り手の設定が「かなり意図的」で「読者を眩暈させる効果が狙われている」と述べている（注8）。そして、複数の語り手については千代子を相対化するための「語り手の交代」であるとし、「対話性」という観点のもと、次のように指摘する。

作品の現在を敬太郎の視点に沿って語ってきた（無人称の）語り手の言説も又、主に敬太郎の体験を題材とする部分で、三人の語りによつて相対化を受けていることは明らかである。比喩的に言えば、この三者の「話」を専ら配置する役割に自らを局限することによつて、この（作品全体の）語り手も、作中人物との対話の場に身を置くのである。

氏のいう「対話性」は、作中人物と語り手という関係だけではなく、物語の読者という視点も踏まえた指摘である。そして氏の見解は、「敬太郎の冒険譚」を支持する立場にある。

ここであらためて、内田氏も注目している三人称の語り手について考えてみたい。三人称の語り手は、物語の対象（受け手）として常に読者を想定する存在であり、物語をどのように読者に伝えるかはその語り手の自由なのである。テキストに則して言えば、前半で敬太郎の冒険を語るのも、そして後半で敬太郎が聞いた話を須永や松本に語るために身を隠すのも、語り手の意図によるものなの

である。この時、後半で語り手が身を隠した理由、語り手の意図というものが想定される。テクストの形態から判断するに、それは、自身で語るよりも須永や松本に語らせる方がよいと語り手が判断したためであると言える。自身以外の当事者（とその近親者）が語る方が自身の意図がより伝わるということであり、それはすなわち、語り手自身が須永の物語の中に、読者に伝えるべき何かを見出しているということである。しかし、須永の物語は、読者に向かつてのみ示されているわけではない。前半で語り手が自身の（声）で語っていた敬太郎に対しても、それは示されている。つまり、語り手は、依然として敬太郎への眼差しも失つてはいないのである。

語り手は、当初敬太郎が冒険し、周囲の人物から話を聞いていく様子を語っていた。しかし、敬太郎が聞いた須永に関する話の中に何もものかを見出し、その当事者自身の言葉を、敬太郎だけでなく読者にも聞かせることにした。そして、その際に語り手の採用した、当事者自身に語らせるという方法が、「読者を眩暈させる効果」をもたらしているのである。先行研究における「敬太郎の冒険譚」か「須永の物語」かという二者択一は、敬太郎が須永の話を聞いたという（作品内での）事実を、どこに焦点を当てて見るかの結果に他ならない。語り手が須永の話に何らかを見出した結果、中村直子氏が指摘するように「物語が次第に敬太郎を視点とした語りでは担いきれなくなつた」（注9）ということは確かにあろう。だが、須永の物語において物語を司っているのは、やはり語り手以外に存在しない。語り手が示そうとしているのは、敬太郎が様々な経験をしていくこととであり、またその中の一つとしての須永の話である。やや漠然と

した言い方ではあるが、語り手は、テクストの総体そのものを読者に示しているのだ。

二 語り手の抑圧

ここでは、先程挙げたもう一つの問題、「雨の降る日」が一人称ではなく三人称で語られていることについて検討していく。今見たように、「須永の話」と「松本の話」が一人称で彼ら自身によつて語られているのは、何らかの意図があつて語り手がそのような方法を選つたためである。ならば、「雨の降る日」だけが本来の語り手である千代子の一人称ではないことにも、三人称の語り手の意図があつたと考えることは妥当であろう。このことは、藤井淑禎氏の「三人称体の地の文のなかで揶揄や批判をおこなうのではなく、作中人物の会話や、語り手による一人称体のなかでそれをおこなう」ということは、一面ではたしかに書き手による介入の排除にはちがいないが、他方ではむしろそれとは逆に、作中人物や語り手を代弁者として、書き手に、より直接的な真情の吐露を可能にさせることでもあつたことは、注目すべき点であるといわなくてはならない。」という指摘とも関連している（注10）。氏の見解には、語り手を操作する書き手すなわち漱石の存在までの考慮がうかがえるが、それについては後に取り上げることにして、ここでは語り手のレベルで考察を試みる。

語り手の意図を邪推する前に、テクストからうかがえる千代子像を整理する必要がある。次に引くのは、山田輝彦氏による見解である（注11）。

「雨の降る日」の主人公は勿論宵子なのだが、その宵子に終始つきそい、その死を心底から哀傷したのは、千代子だった。

千代子は敬太郎の冒険の冒頭にまず謎めいた姿を表わし、処女か、細君か、洋妾じやうせんの類かと、敬太郎の想像をふくらませた。そしてまた、正体のまだ分からぬ段階で、松本の口から「高等淫売」（報告十二）といわれた。この言葉には、漱石その人の、いかなる女性にもある潜在的娼婦性への嫌悪が表明されているのだろう。それはいずれも敬太郎の想像裡に生じた虚像に過ぎなかった。千代子が始めてその良家の娘としての姿を表すのはこの章においてである。「雨の降る日」は、そのストーリーの展開に則していえば、千代子の心の美しさを語っているのではないか。例えば宵子のやわらかな縮れ毛に櫛を入れて、赤いリボンを結んでやったり、粥を一匙ずつすくって口に入れてやる千代子の姿には春日のような優しさが満ち溢れているではないか。

（傍線引用者、以下同。傍点本文）

氏が説くように、「宵子に終始つきそい、その死を心底から哀傷した」のが千代子であることは疑問の余地がないであろう。しかし、次のような言説もテキストには存在している。

「叔母さん又奮発して、宵子さんと瓜二つの様な子を拵えて頂戴。可愛がつて上げるから」

「宵子と同じ子ぢや不可ないでせう、宵子でなくつちや。御茶碗や帽子と違つて代りが出来たつて、亡くしたのを忘れる訳にや行かないんだから」

「己は雨の降る日に紹介状を持つて会ひに来る男が厭になつ

た」

（「雨の降る日」八）

「雨の降る日」の末尾である。ここでの千代子の発言は、愛娘を亡くしたばかりの松本夫婦の心中を全く考えていないもののようにも聞こえる。彼女の無神経さといったものがうかがえるのである。

「雨に降る日」には、千代子の「心の美しさ」や「春日のような優しさ」などの正的要素と同時に、無神経さといった負的要素も読みとることができる。そしてそれは、一般的に自身に不利な発言を隠そうとする傾向がある話者と、それを防いだ三人称の語り手の存在によつて始めて可能なのである。須田喜代次氏は「この『雨の降る日』の章においては、千代子が語るといふ形式はとりながらも（中略）、内容的には千代子によつて色付けされていない『過去』が提示されている」と指摘しているが（注12）、「千代子によつて色付けされていない『過去』」というものが、まさに今述べた、負的要素を隠そうとする話者の傾向なのである。

その時の千代子に、自身に不利な発言を隠そうとする意図があつたかどうかは断定できない。彼女の発言が、結果として無神経なものになったとしても、松本夫婦の寂しさに対する彼女なりの対応ではあつたのであり、そのことを自省して隠さずに話すという可能性も想定されるからだ。しかし、次の箇所には、千代子の無神経さという性格がより明確に示されている。

夫から又一ヶ月程経つて、梅の音信の新聞に出る頃、敬太郎はある日曜の午後を、久し振に須永の二階で暮した時、偶然遊びに来てゐた千代子に出逢つた。三人して夫から夫へと纏まら

ない話を続けて行くうちに、不図松本の評判が千代子の口の上つた。

「あの叔父さんも随分変つてるのね。雨が降ると一しきり能く御客を断つた事があつてよ。今でも左うか知ら」

(二) 雨の降る日 (一)

千代子は、松本が雨の日の客を断る理由を知つていながら、「随分変つてる」と評している。そしてこの彼女の態度は、「雨の降る日」の末尾での松本夫婦に対する発言と一致している。

これらから、千代子に「風の如く自由に振舞ふ」(「須永の話」十(二)、時として無神経とも言える性質があり、それは過去の宵子の葬式の時点でも、また須永の部屋での談笑の時点でも、変化してないということが分かる。そうであるのに、語り手が千代子に形式的な語り手の役しか与えず、彼女自身の言葉で語らせなかつたのは、「語り手が彼女に対して肯定的な評価をしていない、あるいはできない男性的存在だからである。彼女の一人称としての肉声は封じられているのである。すなわち、千代子は語り手によって抑圧されていると言つてよい。後に語り手が須永の話を重視することを考えれば、須永の千代子に対する「感情に訴へる若い女の気質」(同三十四)という意識を共有したとも言えるであろう(注13)。そしてこのことは、やがて須永によつて語られる千代子の「技巧」(同三十一)ともつながり、彼女の不透明性をより強くするのである。ここから考えれば、先に見た山田氏の「いかなる女性にもある潜在的娼婦性への嫌悪」という指摘は、まず語り手のレベルにおいて論じられるべきであろう(注14)。

三 「高等遊民」というモチーフ

これまで、テクストにおける人稱の問題から、語り手の方法と抑圧の構造を明らかにしてきた。それは、語り手が須永の話を重視したために、敬太郎の冒険譚と人稱において区別し、また須永の語る千代子像を支えるために彼女の言葉を抑圧し隠蔽するというものであつた。そこでここでは、語り手がそのような語りを用いる要因であつたと思われる、「須永の話」や「松本の話」について考察していく。

「須永の話」には、須永と両親とのこれまでの生活と、彼と千代子とのやりとりが語られている。そこで須永は、「神経質に生れた僕」(「須永の話」三)、「神経の鋭どく動く性質だから、者を誇大に考へ過したり、要らぬ僻みを起して見たりする弊がよくある」(同七)と自己を語っている。また、「全く信念の欠乏から来た引込み思案」(同五)という分析は、敬太郎による「至つて退嬰主義の男」(「停留所」一)というそれと一致しているようである。中村氏は、この敬太郎の須永評の直後にある「少くとも敬太郎にはさう見えた。」という言説に着目し、テクストにおける人物が「それぞれ複数の顔を持つことの暗示」であり、「語りの位相を問題にしたならば、(中略)語り手が敬太郎を視点として語る須永像に他ならない」と述べている(注15)。ここから、須永は神経質で消極的な性格であるといふことができ、また彼自身の分析と敬太郎(あるいは語り手)の分析との一致も首肯できよう。

「須永の話」で注目されるのは、彼の語りにも類出する、「気の毒」という感情である。「須永の話」中に十二例あるが、その内訳は次の通りである。

発話者	被発話者	総数	章番号
須永 ↓	母	4	四、五、十八、三十
須永 ↓	千代子	1	十二
須永 ↓	作	4	二十六(3例)、二十九
須永 ↓	田口家	1	十三
母 ↓	須永	1	四
母 ↓	田口家	1	二十

作に対しての例のうち、「二十六」の二つはほぼ同時に出されたものであるので、実質的な総数は3となる。ここから、須永の「気の毒」という感情が、母親に対して最も多く向けられていることが分かる。これは、須永が母親に対しての配慮に意識的であるということの表れである。また、母への配慮ということでは同じような意味を持つ、「が、もし其僕が彼女の意に背く事が多かつたら、是程の不幸は又彼女に取つて決してない訳になる。それを思ふと僕は非常に心苦しい事がある。」(「須永の話」四)、「僕は怪しい絆といふ文字を奇縁といふ意味で此所に使ふ事の出来ないのを深く母の為に悲しむのである。」(同六)、「一頃は思ひ直して出来得るならば母の希望通り千代子を貰つて遣りたいとも考へた。」(七)、「母の満足を買ふための努力」(同)、「唯自分の我を通す為に、弱い親の自由を奪ふのは残酷な子に違ないといふ心持が、何処にか萌す」(同八)、「一年寄りに済まないといふ苦痛」(同十八)といった言説も見受けられる。

これは、彼の過去を敬太郎に語る時点ですでに判明している、彼と母親との継子関係の裏返しであると思われる。二人の関係が敬太郎(と読者)に明かされるのは「松本の話」においてであるが、「僕は自分の嗜好や性質の上に於て、母に大変能く似た所と、全く違つた所と両方有つてゐる。」(「須永の話」十九)、「其内で僕の最も気になるのは、僕の顔が父に丈似て、母とは丸で縁のない目鼻立に出来上つてゐる事である。」(同)というように、「須永の話」でも彼と母親とが実の親子ではないことが匂わされている。つまり、「過去幾年かの間、(中略)詳しい研究を人知れず重ねた」(同)とあるように、須永は松本から真実を聞き出す以前から、母との関係に疑念を抱いていたのである。そして、血のつながりがないからこそ母との関係に意識的で、母に「気の毒」な思いをさせまいとして千代子との結婚を思慮するのである。その意味で、彼の千代子に対する思ひは自発的とは言い難く、彼女の彼に対するアプローチがあるからこそ自己を疑問視し、「高木に対する嫉妬」(同二十八)という妄想にとりつかれるのである(注16)。

このこと関連するのが、須永の妹である「妙ちゃん」が彼のことを「常に市蔵ちゃんく」と云つて、兄さんとは決して呼ばなかつた」(「須永の話」四)ことである。初読の読者はいくらか疑問を持ち、やがて松本によつて明かされる須永と母との関係を知り、それとの関わりを意識するであろう。これは、再読以降の読者の場合も同じかも知れない。しかし、「妙ちゃん」は妹であり、彼女が須永と母親の関係を知つていたとは考えられないのである。このことに関して、米田利昭氏は次のように説く(注17)。

妹が死ぬ前の母はどうだったのだろうか。妹の言葉からすれば、

市蔵を、戸籍上はどうであれ実質的な扱いとしては、庶子（父の認知した妾腹の子）としてしか認めなかった、ということである。つまり、妹の死によって母は変わった。須永はこれ以上追究していないが、実の子が死んだことで扱いの変わるような愛情は、御都合主義であつて、本当の愛情ではない。須永が母の望む千代子との結婚を拒むのは、かつてのそういう母への復讐と見られないこともない。いいかえると、それほどまでに絶対の愛を求めている、愛の乞食のように。千代子に対しても全く同じであつた。

氏が言うように、須永は母親からの「愛を求めている」と考えられる。しかし、「千代子に対しても全く同じであつた」のか。彼が考へている千代子への思いは、母親への愛の形を変えた表れであつて、先ほど述べたように妄想なのではないだろうか。

ところで、須永の性格について松本は次のように説明する。

市蔵といふ男は世の中と接触する度に、内へとぐるを捲き込む性質である。だから一つ刺戟を受けると、其刺戟が夫から夫へと廻転して、段々深く細かく心の奥に喰ひ込んで行く。さうして何処迄喰ひ込んで行つても隙限を知らない同じ作用が連続して、彼を苦しめる。仕舞には何うかして此内面の活動から逃れたいと祈る位に気を悩ますのだけれども、自分の力では如何ともすべからざる呪ひの如くに引つ張られて行く。さうして何時か此努力の為に斃れなければならない、たつた一人で斃れなければならないといふ怖れを抱くやうになる。さうして気狂の

様に疲れる。

（「松本の話」一）

この指摘は、先に見た須永の神経質で消極的な性格と一致する。ここから、「松本の話」には、須永の性格を第三者である松本の視線を通して補完する働きがあることが分かる。また、松本が、自身が高等遊民であること（「報告」九、十）や、彼と「市蔵の性質があまり能く似てゐる」ことに須永の母や田口の妻が驚いていること（「松本の話」一）を語ることで、須永が「母子共衣食の上に不安の憂を知らない好い身分」であり「為になる親類があつて、幾何でも出世の世話をして遣らうといふのに、彼は何だ蚊だと手前勝手許並べて、今以て愚図々としてゐる」こと（「停留所」一）などと相まつて、須永も高等遊民であるという認識を讀者に与えている。これは、高等遊民は高学歴であるがゆえに思索に富み、その時間を獲得しているという意味づけが、語り手によつて仕組まれたことを意味する。

だが、高等遊民という当時の社会問題が、どれほどテキストに有効であつたのか。先行研究でも高等遊民については言が費やされており、例えば長島裕子氏は、同時代の言説を意識しつつ次のように説く（注18）。

したがつて、高等遊民問題は一方で国家経済上の損失という経済問題として捉えられ、もう一方で社会機構の中に位置づけにくい「危険人物」として警戒する傾向を孕んだ問題として捉えられたのである。このような情勢の中で、先にみた「新潮」の記事（山路愛山・木下尚江・内田魯庵による談話『所謂高等遊民問題』明治四十五年二月——引用者注）や山崎紫紅の発言

『高等遊民の権威』 明治四十五年四月十四日付『横浜貿易新報』中の『日曜文壇』——同)が、「高等遊民」をいずれも擁護する立場に立つてなされたのは、「高等遊民」イコール「危険人物」視に対する反発という点で軌を一にしていると言える。

このように述べた後、氏はテキストにおける松本を分析して「決して肯定的な存在ではない」と意味づけている。また伊豆利彦氏も、「新潮」の談話や明治四十四年十二月の『早稲田文学』彙報欄を引き、長島氏と同様の見解を示しつつ、「現実から自己を遠ざけ、ひたすら『高等遊民』として生きる松本の批評は、批評のための批評であり、観念的であつた。現実には生きる人間としての『その人の本体』が疎外されていた。後の作品『こころ』の奥さんの言葉を使えば、『空っぽな理屈』だつたのである。」と指摘している(注19)。

両氏の見解は、同時代での高等遊民をめぐる言説の意義づけと、それに反するような松本に対しての否定的評価である。これは、松本が須永や自身に対して行つてゐる高等遊民というレッテル化の意味の少なさを説くものでもあるだろう。すなわち、語り手は、母や千代子に関する須永の煩悶に興味を持ち、それを語るために、須永が理知の人でかつ思索の時間を有する人であることを高等遊民というモチーフで表し、それを松本によって保証させているのである。

冒頭でも見たように、高等遊民の意味やその考察の意義は重要であり、示唆に富むことは否めない。だが、テキストにおいては、須永や松本を造形する手段としてしか用いられていないように思える。語り手も同時代にとらわれる存在であり、当時の社会問題を取り込みつつそれに須永や松本を重ねる(注20)という意図はうかがえる

が、それがどれだけ有効であつたかについて、再度検証する必要があるように思える。

四 語り手と漱石の間、あるいは漱石の意図

最後に、語り手と作家漱石とについて考察する。本来ならば、語り手と作家とは異なる存在として扱うべきであるが、先行研究でしばし取り上げられてきたように、「雨の降る日」中の言説と漱石の日記(注21)との酷似や、松本の語る「或学者の講演」(「松本の話」五)と漱石の講演「現代日本の開化」(明治四十四年八月十五日)との比較など、漱石自身に関わる事項がテキストに反映されている。また、このことを除いても、漱石の「彼岸過迄」における語り手の造形、さらには漱石文学全体における方法の変遷を探る意味で、重要と思われるからである。

漱石による語り手についての見解としては、やはり「文学論」(明治四十年五月 大倉書店)中の「間隔論」が挙げられるだろう。このなかで漱石は、「(作中人物—作者—読者)の図式のもとに、作品内容や作中人物を読者に紹介するのが作者である、という認識を示す。そして、作家の作品との位置(登場人物との距離)によつて異なる、「読者を著者の傍に引きつけて、両者を同立脚地に置く」「批評的作物」と、「或は読者を著者の傍らに引くに代ふるに、著者自から動いて篇中の人物と融化し、毫も其介在して独存するの痕跡を留めざるが如き手段を用ふ」「同情的作物」とを提示し、「形式的間隔論をなさんが為めに挙げたる二方法は是に於てか逆行して作家の態度とな

り、心的状況となり、主義となり、人生観となり、発して小説の二大區別となる。」と述べている。「批評的作物」の場合は、作家自身が批判的であるために読者も作中人物に対して批評的になり、反対に「同情的作物」では、作中人物と「融化」した作家を通して作中人物を把握するために同情的になるといふことであり、そしてこの二つの方法が、「作家の態度」「(作家の) 心的状況」「(作家の) 主義」「(作家の) 人生観」の表れであると結論づけている(注22)。

結論から言えば、「彼岸過迄」における漱石の態度は、「批評的作物」と「同情的作物」との両方の要素が含まれており、より厳密には、「批評的作物」から「同情的作物」へと移行している。これは、テクストの前半で敬太郎の冒険譚を語っていた語り手が、後半において須永の話を語るといふように、焦点がずれていくことから判断できる。さらに、語り手が、前半では三人称で、後半では姿を隠して松本や須永に一人称で語らせていることも考えあわせると、先の〈作中人物―作者―読者〉という図式に語り手が加味され、〈作中人物―語り手―作者―読者〉という図式へと深化していることがうかがえる。

「彼岸過迄」以前にも漱石は、三人称による「虞美人草」(明治四十年六月く十月 『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』)、「三四郎」(明治四十一年九月く十二月 同)、「それから」(明治四十二年六月く十月 同)、「門」(明治四十三年三月く六月 同)、また厳密なそれとは言えないが、一人称から三人称へと移行している「夢十夜」(明治四十一年七月く八月 同)といった作品を書いている。だが、これらでの語り手には、「彼岸過迄」における語り手のような語るべき

物語の移行は見受けられない。その意味で、〈登場人物―語り手―作者―読者〉という図式は、「彼岸過迄」においてその萌芽をみたと言うことができるだろう。

漱石が高等遊民に関心を持っていたことは、「彼岸過迄」執筆中に出版された笹川臨風宛書簡(明治四十五年二月十三日付)の、「小説をやめて高等遊民として存在する工夫色々勸考中に候へども名案もなく苦しがり居候」という箇所を確認できる。だが、その後の漱石は、必ずしも「彼岸過迄」の語り手と同一ではなかった。次に挙げるのは、漱石の講演「道楽と職業」(明治四十四年八月十三日)と関わらせての、長島裕子氏による見解である(注23)。

小説をやめることと引きかえに「高等遊民」が志向されているのであるから、「高等遊民」と「道楽本位の職業」とは全く別のものである。それは、「自我中心」に「己の為」の「道楽本位」を貫くことの放棄であり、そこからの遁走である。しかし、漱石は「苦しがり」つつ、ひたすらに小説執筆の道を歩いていった。続く作品『行人』は途中で執筆中止を余儀なくされる程の神経衰弱の中で書かれたが、漱石の進んだ方向は「高等遊民」志向とは正反対の、苦しい方の道だった。

「彼岸過迄」執筆中の漱石にあった高等遊民への志向が、やがて放棄されていくという指摘である。このことは、漱石が須永に見ていたものは、高等遊民としての性質ではなく、それとは必ずしも関連しない須永の煩悶の様であり、彼の人間存在の様であったことを意味する。そして、これと呼応して、「行人」における一郎を語る二郎、「心」において「先生」を語る「私」、さらには「道草」(大正

四年六月〜九月 『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』において健三を語る三人称の語り手の造形へと、登場人物を差異化（非同化）する方向で、漱石テクストの語り手は深化している。「彼岸過迄」においては、（登場人物―語り手―作者―読者）という図式での、語り手と作者との境界が曖昧であった。それが、後に改善されていくのである。「彼岸過迄」における語り手の造形は、そのテクストに限って言えば失敗であったかも知れない。だが、漱石文学全体を通じては、確かな、そして重要な一歩であったのである。

おわりに

「文学論」が書かれたのは「彼岸過迄」の六年前である。その間漱石は、一貫して物語と自身と読者とを意識し続けていた。特に読者に対する意識は新聞連載という発表形式とも関わり、「彼岸過迄」に先立つて両朝日新聞紙上に発表された「彼岸過迄に就て」（明治四十五年一月一日付『東京朝日新聞』及び同『大阪朝日新聞』）中の、「久し振だから成るべく面白いものを書かなければ済まないといふ気がいくらもある。」「かねてから自分は個々の短篇を重ねた末に、其の個々の短篇が相合して一長篇を構成するやうに仕組んだら、新聞小説として存外面白く読まればはしないだらうかといふ意見を持してゐた。が、つい夫を試みる機会もなく今日迄過ぎたのであるから、もし自分の手際が許すならば此の『彼岸過迄』をかねての思はく通りに作り上げたいと考へてゐる。」という箇所に見ることができ

結果、「彼岸過迄」においては不十分だった語り手の造形は、後続する作品で深化し、短編連述という方法は「心」でも採用された。さらに、高等遊民という同時代の社会問題を導入として、近代人の内面を描くというモチーフをも、漱石は獲得したのである。その意味で、山田輝彦氏が「人間の研究者」（「停留所」一）でありたかつたのが敬太郎であると述べる（注24）のは、一面的な把握にとどまっている。「人間の研究者」たろうとしたのは、敬太郎だけではなく、語り手も、また漱石もそうであったのである。

「彼岸過迄」は、後期漱石において、また漱石文学全体において、確かに重要な礎であったと言える。

注

(1) 米田利昭「高等遊民とは何か ―『彼岸過迄』を読む―」（平成元年二月 『日本文学』）

(2) 「心」に関しては、「先生」の遺書が語り手である「私」によって紹介された手紙に過ぎないと判断すれば、物語は一人称の語り手である「私」によつて統一されているとすることができよう。しかし、「私」が引用する遺書に鈎括弧が付されているように、「先生」の遺書は「下 先生と遺書」という独立した一つの章で示されており、そこでは以前の二章での語り手が「私」が一度も姿を表さないことから、「下」における語り手が「先生」であるということも不可能ではないと考える。「下」における語り手は、以前の二章に比して曖昧なのである。

(3) 中村直子『彼岸過迄』 ―その関係性の物語―（平成三年

- 三月 『東京女子大学紀要「論集」』
- (4) 安藤久美子 『彼岸過迄』の構造 — 須永の意識構造と作品構造 — (昭和五十六年十一月 『文学・語学』)
- (5) 赤井恵子 『彼岸過迄』考 (昭和六十年五月 『熊本短大論集』)
- (6) 重松泰雄 (趣向)としての須永市蔵 — 『彼岸過迄』管見 — (平成元年一月 『文学』)
- (7) 山田有策 『彼岸過迄』 敬太郎をめぐる (昭和五十七年五月 『夏目漱石必携II』別冊国文学No.14)
- (8) 内田道雄 『彼岸過迄』再考 (昭和六十二年七月 『古典と現代』五五号)
- (9) 前掲注3参照。
- (10) 藤井淑禎 『彼岸過迄』から始まる道 (平成四年五月 『国文学』)
- (11) 山田輝彦 『彼岸過迄』論 — 敬太郎の冒険 — (昭和五十五年二月 『福岡教育大学紀要(文科編)』29号 『夏目漱石の文学』(昭和五十九年十一月 桜楓社)所収)
- (12) 須田喜代次 『彼岸過迄』論 — 聴き手としての敬太郎 — (平成四年四月 『国文学 言語と文芸』 桜楓社)
- (13) これを換言すれば、語り手と須永との(重なり)ということになる。事実、「須永の話」では須永が敬太郎に向かって語っているという構図であるにも関わらず、「此話を聞くもの」に取つては、定めし不本意であらう。「(須永の話」二十五)、「もし此話を聞くものが、嫉妬だといふなら、僕には少しも異存がない。」(同三十)といった、敬太郎以外の聴き手を想定する言説がテクストには存する。また、「須永も景色だけは誉めたが、まだ斯んな吹き晴らしの土堤などを歩く季節ぢやないと云つて、寒いのに伴れ出した敬太郎を恨んだ。」(同二)も、その証左となる。
- (14) 押野武志 『静』に声はあるのか — 『こころ』における抑圧の構造 — (平成四年十月 『文学』)は、「心」における静について、「彼女は、先生や『私』の眼差しを通してしか表象されていない。」「静」は、寡黙である。というより、言葉を与えられていない。」とし、その理由を『静』の言葉は男たちの死の美学を脅かしてしまうからだ。」と説いている。
- (15) 前掲注3参照。また、中村氏の言う「複数の顔を持つ」とは、氏も指摘するように千代子においても該当し、「雨の降る日」の三人称による語りがそのために行われていることを再度確認しておく。
- (16) 中島国彦氏は『漱石全集』第七巻 注解 (平成六年六月 岩波書店)のなかで、「疑惑の裏打」(「須永の話」三)から、テクストに「須永の心情の奥に、絶えず『疑惑』の世界が存在するという設定」があると指摘している。換言すれば、須永が「疑惑」にとりつかれやすい性格であるということになる。
- (17) 前掲注1参照。
- (18) 長島裕子 『高等遊民』をめぐる — 『彼岸過迄』の松本恒三 — (昭和五十四年十二月 『文藝と批評』)

(19) 伊豆利彦「夏目漱石『彼岸過迄』の『高等遊民』」(平成二年

三月 『横浜市立大学論叢』)

(20) 長島氏は、「生活の外見ではなしに、その生活を形づくっている精神の在り様を問題にする時、須永は『高等遊民』の松本とは対置された存在である」と述べているが(前掲注18参照)、語り手の意図としてはやはり両者は同一に位置づけられていたと考える。また、そのような両者の造形により、語り手が抑圧することで表出させた千代子像との対比もより強調されるのである。

(21) 明治四十四年十一月二十九日付から同十二月五日付。

(22) 拙稿『坊っちゃん』論 ―写生文、あるいは一人称回想への眼差し―(平成十二年九月 『国文学攷』第一六七号)

(23) 前掲注18参照。

(24) 前掲注11参照。

〔付記〕

テクスト及び漱石の評論は全て『漱石全集』(平成五年十二月
〜十一年三月 岩波書店)に、また啄木「時代閉塞の現状」の
引用は『明治文学全集52 石川啄木集』(昭和四十五年三月 筑
摩書房)に拠る。

(やました こうせい)